

令和2年度 金城大学・短大合同研修会及び専任・非常勤合同研修会 報告書

【日時】 令和3年3月23日（火）10：00～12：00

【場所】 金城大学医療健康学部棟 H211 中講義室（オンライン参加可）

【方法】 対面受講または Zoom によるオンライン受講

【出席者】 金城大学短期大学部幼児教育学科専任教員（14名）・金城大学社会福祉学部子ども福祉学科専任教員（9名）・非常勤講師（12名）

1. 講演内容の骨子

本学は3つのポリシー（AP・CP・DP）を設定し教育を行っているが、9割近くの学生を保育現場へと送り出している。その教育内容は、大学・短大側の立場のみで考えられるものではなく、保育職を目指し大学・短大へ送り出す高校から学生を受け入れ、保育者として育てていく保育現場の三者で連携して、保育者としての資質能力を養成していくことが求められる。文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」に採択された仁愛女子短期大学「保育者養成のためのキャリア・ルーブリックの開発」という取り組みは、「高校、短大、保育現場の各段階で身につけるべき資質能力及びその段階的基準を共通化し、学びの可視化を図るためのキャリア・ルーブリックの開発を試みる」というものであり、本学でも大いに参考となる内容であった。今回、大短合同研修会と専任非常勤合同研修会の同時開催とし、共に学ぶ機会になった。

2. 講演後の質問

中（大学）：89校の2年制の養成校のディプロマポリシーをテキストマイニング用いて検討していらっしゃるが、4年制でも行っているのか聞きたい。

松川（仁短）：4年制と比較してみたいという思いはあるが、そこまで至っていない。現在は2年制のみ検討した。将来は、同じような方法で4年制も行っていきたい。

米川（短大）：松川先生が示されたシラバスにおいて、それぞれの科目の授業の達成目標をディプロマと関連付けし、%（重みづけ）が出てくるのはシステム的に自動で数値が出てくるのか？教員が書き込むのか？

松川（仁短）：担当者が書き込むようになっている。シラバスの目標は各担当者が記載するが、その目標に対応する学習成果についても担当者が考えて当てはめる。その関係が今年度の研究を通して、何故？これがDPなのかと疑問を感じることもあったので、先生方がどのような意図もっているのか、学習成果がどういうことを意味しているのかが十分に浸透していないということを感じた。非常勤も含め、教員全体でDPを共有していかなければならないと思う。

米川（短大）：客観的に精査する立場の方はいるのか？

松川（仁短）：教育課程委員会の議長がシラバスの検討はしているが、細かく見ることは難しいので、まずはDPの共有から始めて、各担当の先生が理解をしてから、シラバスの重み付けを行うことが大切である。チェック体制においても議長の負担が大きいので、組織的に考えていかなければならないと思っている。

斎藤（大学）：オープンキャンパスでOBの方を呼ぶのは、面白い試みだと思う。本学では大学生と高校の繋がりを大切にしている、教員では伝えられないことを大学生が伝えてくれたため高校生にアピールできているが、OBの方が関わってくるといことでより大学での学びを伝えることが出来ると思った。OBの方も外部の方なので、そういう方を呼ぶための技術的なものを教えてほしい。

増田（仁短）：OBだけでなく、実行委員のスタッフとして短大生もかなり多く参加してくれている。ただ、目的が色々あると思う。高校生が何を知りたいか？と思うと学生だと思う。仁愛短大に入るとどのような学生生活なのか等、今までは、そんな感じのオープンキャンパスだった。今回の発表の趣旨から考えると、短大生活の先を見ていかないと駄目だよねという意味で卒業生を入れている。一つの空間に学生も高校生も現場の先生（OB）もいる。その3者を出会わせるということに意味があるのではないかと。出会って感じることは多分ある。外部の人にきてもらうので大変な時もあるが、仁愛短大は卒業生との繋がりはいい。各教員は、多くの卒業生と連絡を取っているし、免許更新等で仁短を選んで帰ってきてくれる。そういうときに、取材を頼んだりしている。システムのやっているのではなく、各教員等が声をかけて頼んでいる。

斎藤（大学）：大学、短大が学生募集ということも重要だが、それ以上に大学・短大で保育を学ぶことの良さを伝えることを主眼にしているので、そういうことでOB・OG、その方たちを送り出す園の了解を得ているというのが大きいということか。

増田（仁短）：基本的には、斎藤先生のおっしゃるとおりです。卒業生が来るよということと保護者が来たりする。保護者が色々聞きたくなるので、卒業生がくることで、学生募集のメリットがある。

米川（短大）：世の中、保育業界はブラックであるというイメージがあるので、実際に現場で生き生きと働いている様子を見るというのは、高校生にとって、すごく刺激的だと思う。ただ、人は選ばないとはいけませんかね。

山田（短大）：高校の模擬授業のことですが、私たちも模擬授業にいかせてもらうが、継続していくことが難しい。1年という単位の中で、高校とカリキュラムを考えて行っているのか。

増田（仁短）：入学地域支援課と教員がよく雑談をする。今度、あの高校に行くとなった時に、どちらかが思い出す。雑談が大事である。それぞれが自分の仕事だけをするのではなく、何とかできないかと入り込んでいくうちに依頼が来たりする。教員は依頼が来たら、全力でまた依頼がくるように授業をする。

山田（短大）：入試広報と教員との連携のために雑談が大切ということですね。そういう時間を多く持つていくことが必要であると思いました。

側垣（大学）：連携が養成という視点と募集という視点があるということだが、学生の養成のことについてお聞きしたい。ルーブリックは本学でも全学で7、8年前に行ったことがある。他学部では、そのあたりが進化している。こどもの方では一旦作ったが、なかなか教員として、学生にどう伝えていくのか等、十分に活用できていないなと思っている。大学全体としては、シラバスのところに、この科目は、どのDPに関連しているのかを示して、学生がいつでも見ることができるようになっている。学習成果を高めるためには、学生にきめ細かく、君たちが学んでいるのは、こういうこと等、少し強調して伝えても良いのではないかという場合もあるが、私自身は出来ていない。学習成果を高めるためにルーブリックやDPを意識しながら、学生にどのように、理解させたり伝えたりしているのかを教えてください。

松川（仁短）：シラバスを通して説明している。最初の授業でシラバスの説明をする時にこのような力をつけてほしいと伝えているが、私も学生に伝わっているかは確証が持てない。

しかし、学生がどれくらいの力を身に着けたかは、シラバスの重みづけ表のパーセンテージを元にして、それぞれの評価に応じた到達度をすべて加算し Semester毎に学生に通知している。成績評価とともに、それぞれの学習成果が身につけているかが、学生に伝わるようにしている。

側垣（大学）：今まで、第1回目の授業では授業の概要には伝えていたが、シラバスに言及してやったことはない。もう1つ、重み付けの項目数は、科目担当者が決めているのか。例えば、10項目で100パーセントになるようになっているのか？それとも余白があるのか？意欲のようなものも項目に入れてあるのか？

松川（仁短）：重み付けは1つの科目で100パーセントになるように作成している。達成目標に対して学習成果がどのくらいというのは、科目担当が決めている。今回の研究を通して、目標と重み付けが重要であることを教員に伝えていかなければならないと思った。

石野（短大）：中学・高校の保育体験頼みではいけないと感じた。ブランディング推進室とはどのような仕事をするとところなのか教えてください。

増田（仁短）：室長は私ともう一人で行っている。入試地域支援課と一緒にやっている。

石野（短大）：教員は参加しているのか？

増田（仁短）研究は別なので、主に教員が進めている。それをまとめているのが、ブランディング推進室である。

3. 本学参加者によるシェアリングを行った。A4の用紙に①印象に残っていること②本学

に取り入れるなら③講師への質問や感想を記載した。その後大短教員混合で2~3人の1つのグループとなり、記載した内容についてシェアリングを行った。それらの内容を以下にまとめる。

①印象に残っていること

教員が記載していた内容として「DP やシラバスの活用」「高校－大学－現場（新卒）－現場（中堅・管理職）をシームレスなつながり」「広報活動」のことに多くの教員が記載していた。

②本学に取り入れるなら

教員の記載内容として「DP やシラバスの活用」「広報活動」について多くの教員が記載していた。記載されていた具体案について以下にまとめる。

「DP やシラバスの活用」

- ・担当科目のシラバスをもとに、学生にわかりやすく伝えていくために伝え方の工夫や機会が必要である。
- ・シラバスの中に DP や成績を付ける際の重みづけについての記載があることで、学生が科目ごとの到達目標を知ることにつながるのではないか。
- ・入学して初めの授業ですべての科目が DP を説明するとすれば、1週間で18~19科目を聞くことになり、学生がいっぱいいっぱいにならないか心配
- ・DP を具体的かつ分かりやすい言葉を使ったものを作り直す。

「高校－大学－現場（新卒）－現場（中堅・管理職）をシームレスなつながり」

- ・オープンキャンパスや高校へのガイダンスなどで高校生、大学生、現場職員が出会うことができる場を作る。
- ・高校の教員に保育（資質や能力、仕事内容など）について知ってもらい、進路指導に活用してもらう。
- ・研究活動を通して学生と現場をつなぐ。（共同研究、保育者の卒論発表会への参加）
- ・卒業生に赤ちゃんを連れてきてもらい、学生との触れ合いの機会を作る。

「広報活動」

- ・オープンキャンパスで卒業生に講師になってもらい、高校生や学生と関わりを持つような企画は本学でも行っているが、アピールの仕方に工夫が必要なのではないか。しかし企画を実施する人と外部に発信する人が同じでは負担が大きくなる。
- ・オープンキャンパスでTV取材に入ってもらう
- ・Youtubeの活用はコロナ禍において大変有効ではないか。ただ、企画→撮影→編集と時間

をかけて動画を制作したとしても、高校生などに視聴してもらえる動画のクオリティにできるのか。自己満足にならないか心配である。

- ・少人数のブランディング専門の部署を作る
- ・白山市における子育てニーズに対応しながら地域との連携を図る（子育て支援センター、地産地消につながる食育活動など）
- ・美術学科の学生による「金城の保育」キャラクターやロゴの制作

「教職員の連携」

大学と短大の連携を継続して行い、「金城子育て支援センター」「合同研修会」など実績をアピールする。

教員と職員の連携の見直し

③感想

- ・シームレスなつながりを意識しながらも、保育に向かない学生や、他分野への興味が出た学生への対応についても考えていかなければならないのではないかな。
- ・「金城の保育」をもう一度見直し、金城の良さを出せるように動き出したい。
- ・研修会を通して「保育者養成」の大切さを改めて感じた。
- ・高校生～養成校～現場で総合的に幼児教育をとらえることができた。
- ・具体的な取り組みの紹介が分かりやすく、参考になった。
- ・研修で学んだことや日頃からの悩みをうまく実行につなげたい。

以上が本学参加者によるシェアリングの内容である。

※シェアリング内容の詳細については各参加者が記載した A4 の用紙参照

4. 吉岡副学長によるまとめ

仁愛短大は行動力がある。保育士養成と学生募集を 2 本柱でやっているが小学校段階から職場に出てからのことまでを一貫していて体系的である。だから、こういうことが必要であるという目標やねらいが非常にはっきりしていて、我々はこの時期にどのような形でこの施設と関わっていかなければならないとか、オープンキャンパスではこうしなければならぬというねらいと実践が繋がっている。

今回の研修から我々のことを振り返ると保育プロジェクトや大短連携、支援センターを作り地域に貢献しよう等と活動している。しかし、なぜ、今、こういう形で地域連携をしなければならないのか、大短連携しなければならないのかというねらいや目標が少し弱かったかと反省している。遊学館との体験講座 高校訪問等いろいろなことをやっているが「やらなければならないからやっている」というところがある。何故、やらなければならないかを考えていく必要があることを強く気づかされた研修であった。